

創造的な表現力を伸ばす歌唱指導の工夫

—— 楽譜と指揮の効果的な活用を通して（第2学年） ——

沖縄県立宜野湾高等学校教諭 比 嘉 一 史

I テーマ設定の理由

高等学校学習指導要領解説音楽編（以下「解説音楽編」）音楽Ⅱ目標において「音楽の諸活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、個性豊かな表現の能力と主体的な鑑賞の能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深める。」とある。また、音楽Ⅱ目標の解説において、「個性豊かな表現の能力を伸ばすためには、生徒自らが感性を働かせて思考・判断し、技能を高め、音楽を表現する場を設けることが重要となる。」とあり、この感性を働かせて思考・判断し、生徒自身が思いや意図を持ちながら、技能を高めていけるような学習を通して、音楽を愛好する心情を育てていきたい。

本校生徒は音楽科の全ての領域において意欲的に取り組み、中でも歌唱授業においては率先して活動する傾向にある。これまでの授業を振り返ると、生徒のイメージを大切にしながら、音楽表現を創意工夫する中で、思いや意図を持たせることに取り組んできた。しかし、作曲者の思いや意図を捉えたり、歴史的背景を踏まえ、生徒自ら音楽表現を創意工夫していく創造的な表現力を伸ばすことにつなげることができていなかった。創造的な表現力を伸ばしていくためには、音楽を形づくっている諸要素とその働きの視点で音楽表現を捉えさせ、作者の思いや意図と生徒の思いや意図を比較し関連付けたりする中で、捉えた音楽表現と自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けて考えさせることが必要であると考え。そこで、感性を働かせて思考・判断させ音楽表現を創意工夫させる授業に取り組んでいきたい。

本研究では、楽譜の活用を工夫し作曲者の意図した音楽表現と生徒の思いや意図を関連付けることで、自己の音楽表現を自分ごととして捉えさせていく。また、指揮による身体表現活動を取り入れ、音楽表現を視覚化し、歌詞や作品の生まれた背景から見える心情を踏まえながら、客観的に音楽表現を捉えさせ、他者と共有してより良い表現を考えさせていく。このような活動を通して、生徒が主体的に感性を働かせて思考・判断・表現し、音楽表現を追求していくことができるのではないかと考え、このテーマを設定した。

〈研究仮説〉

表現領域、歌唱の学習において、楽譜を活用して感じ取った音楽表現や、指揮による身体表現活動を用いて明確にした音楽表現を、楽曲の歴史的・文化的背景と関連付けながら他者と共有させることで、生徒が主体的に感性を働かせて思考・判断・表現しながら根拠をもって音楽表現を追求していく、創造的な表現力を伸ばすことができるであろう。

II 研究内容

1 創造的な表現力について

解説音楽編音楽Ⅰ目標において、「歌唱、器楽、創作において音のつながり方を考え、どのようなつながり方が良いのかを判断し、技能を高めながら表現することは創造的な活動である。」と示されている。このことから、音のつながり方を考え、どのようなつながり方が良いかを判断するためには、イメージをもって自らの思いや意図と、楽曲の構造と音楽を形づくっている要素や歌詞との音楽的関連を自分ごととして捉えさせることが必要であると考え。また、「音の組み合わせの特徴をとらえ、楽曲の背景をかかわらせて考え、自分なりに価値判断し、批評という形で表現することも創造的な活動である。」とあり、創造的な活動とは、生徒が、音楽表現を客観的に捉えながら、作曲者の音楽や歴史的・文化的背景と照らし合わせて、根拠をもってより良い音楽表現

を創意工夫する姿であると捉える。つまり、創造的な活動には、生徒が思いや意図を持って音楽を自分ごととして捉えることと、作曲者の思いや意図と歴史的・文化的背景と関連付けて、根拠をもって音楽表現を客観的に捉えることが必要である。

そこで本研究では、音楽の諸要素を手掛かりに、音のつながり方を考え判断させることで、音楽表現を自分ごととして捉えさせていく。次に、音の組み合わせの特徴を捉えさせるために作曲者の音楽表現の視覚化を図っていく。そして、生徒が捉えた音楽表現と作曲者の音楽表現を比較しながら楽曲の歴史的・文化的背景を理解し根拠をもたせることで、音楽表現を生徒同士で創意工夫させ歌唱表現を追求する姿を目指していく。

2 歌唱指導の工夫について

学習指導要領音楽ⅠA表現によると「歌唱の特徴は、自らの声によって音楽を表現することにある。また、言葉を伴いながら表現するという特徴もある。このような歌唱の特徴を生かして、音楽体験を豊かにし、表現しようとする意欲を育てるとともに、創造的な表現の能力を伸ばすことをねらいとしている。」と示されている。

また、寺尾正（2016）によると「歌唱のための基礎的技能とは、楽譜から楽曲の仕組みや仕掛け、音楽的意味を読み取りながら、発声、ピッチ、リズム、アーティキュレーションなどを正確に表す技能である。言い換えれば、作曲者の意図、作品の意味を正確に読み取りながら、自らの表現を考え実現させる能力ということになる。」とあり、作曲者の意図した音楽表現を正確に読み取りながら、読み取った音楽表現を歌唱技能で正確に表すことの重要性が述べられている。

そこで本研究では、作曲者の意図した音楽表現を正確に読み取らせるために、楽譜を効果的に活用していきたい。次に、指揮による身体表現活動を取り入れ音楽表現を客観的に捉えさせていく。そして、作品の歴史的・文化的背景も関連付けながら音楽表現についての根拠をもたせる。さらに、歌唱に必要な表現を生徒自ら考え、実現させていく姿を目指していきたい。

3 音楽表現を自分ごととして捉えさせる楽譜の活用について

臼井学（2017）によると「生徒にとって興味のある学習活動となるためには、次の2点を満たしている必要がある。①歌う側に、創意工夫を生かした歌唱表現が可能となるために必要な技能が身に付いている。②聴く側に、他者が創意工夫した歌唱表現を確実に知覚・感受し、それを支えとして他者の歌唱表現について自分なりの考えをもつ能力が身に付いている。現実には、この2点を生徒全員が満たしているという状況は難しいだろう。そこで、歌う側がどのようなことを考え、どのような工夫をしたのかを言葉で伝えてから歌ったり、聴く側が、聴いて何を知覚・感受し、自分はどのように考えたのかを言葉で伝えたりする活動が大切になる。」と述べている。音楽表現を言葉で伝えていくためには、生徒に自分自身の音楽表現を考えさせたうえで、他者と共有していく活動が必要であると捉える。

そこで本研究では、自分自身の音楽表現を考えたり他者と音楽表現を共有したりしていくために、楽譜の活用を行う。音楽用語や音楽記号を載せていない楽譜に、各自で創意工夫した音楽表現を記入させ、自分自身が創意工夫した音楽表現をグループ・全体と共有する場を広げながら、お互いの音楽表現を比較する。そして、自分たちの音楽表現を大切にしながら見直していくことを通して、生徒が音楽表現を自分ごととして捉えながら、音楽表現を工夫していく姿につなげていきたい。

4 音楽表現を客観的に捉えさせる指揮の活用について

中学校学習指導要領解説音楽編、第3指導計画の作成と内容の取扱い（6）において「各学年の「A表現」の指導に当たっては、指揮などの身体的表現活動も取り上げるようにすること。」と示されており、本研究においても、中学校での指導内容を踏まえて指揮による身体表現活動を取り入れていく。

樋口隆一（2003）によると、指揮とは、「現代の指揮理論は、リズム、テンポ、強弱、表情など、音高を除いたあらゆる音楽の要素を、両手の運動によって示すことを可能とした。（中略）指揮者

は、まず楽譜の分析を行い、作曲家の音楽的構想を理解し、自己の音楽性との対応のなかから自己の解釈を発見し、その表現の手段として、各部分に即した指揮法の応用を熟慮し、準備を整える。」とある。これは、指揮を振るうえで楽譜の分析と作曲家の音楽的構想を理解する必要を述べている。そのために、生徒が感じ取った音楽表現を記入した楽譜と作曲者の楽譜を比較し、音楽表現の違いや共通点に視点をあてながら、音楽表現について思考・判断させていくことを通して、作曲者の楽譜から読み取れる音楽表現をより理解することにつなげていきたい。

中島卓郎（2016）によると「指揮などの身体的表現活動とは、指揮、舞踏、形式にとらわれない自由な身体的表現などをさしている。授業において身体的表現活動を取り上げることは、生徒が自己のイメージや感情を認識し、それらを変化させたり深化させたりすることにつながる。」とあり、自己のイメージや感情を認識し他者に伝えるため、身振り、指揮棒による緩急などの音楽表現を視覚化していくことで、歌唱に必要な技能を客観的に捉え生徒自ら工夫させていく有効な手段であると考えられる。

そこで本研究では、指揮による身体表現活動を用いることで、作曲者の意図した音楽表現を楽譜から読み取り、より客観的に音楽表現を捉える手立てとして取り入れ、授業展開を図っていく。さらに、生徒が捉えた音楽表現を視覚化し生徒同士で共有することで、より良い音楽表現を追求し高めようとする姿につなげていきたい。

Ⅲ 指導の実際

1 題材名 いろいろな音楽表現を知り「夏の思い出」にふさわしい、歌唱表現を考えよう

2 題材の目標

- (1) 楽曲の魅力を生み出している音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取ることができる。
- (2) 楽曲から感じ取ったことを言葉や指揮で表し伝え合い、楽曲の特徴や演奏のよさを理解して聴くことで、歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、自分たちの音楽表現に意図をもって歌うことができる。

3 題材の評価規準

ア音楽への関心・意欲・態度	イ音楽表現の創意工夫	ウ音楽表現の技能
・歌詞の内容、曲想を生かして、表現を工夫して歌う学習に進んで取り組もうとしている。	・楽曲の魅力を生み出している音楽を形づくっている要素を用いて、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取り、歌詞の内容や曲想を生かし、どのように歌うかについて考えや意図をもっている。	・歌詞の内容や曲想、音楽を形づくっている要素との関わりを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。

4 指導と評価の計画（全三次 7時間）

次	時	学習活動 (活動形態)	指導上の留意点	評価規準			評価方法
				ア	イ	ウ	
一	1	・指揮の役割について知る。 ・指揮の基本を知る。（一斉） ・楽曲は同じで、指揮者の異なる動画を見比べる。 ・既習曲「翼をください」を活用して指揮を体験させる。 ・授業のまとめを行う。	・指揮の役割についてグループで考えさせ発表させる。 ・指揮に必要な基礎的・基本的な技能及び楽曲を取り組むうえで必要な指揮の技能の確認を行う。 ・指揮者による表現の違いや雰囲気の違いに気づかせる。 ・指揮の体験は一斉に斉唱しながら指揮を行う。 ・授業のまとめでは、代表3名～4名を指揮者として選出する。	◎		○	行動観察 自己評価表

	2	- 既習曲「翼をください」の指揮で曲に入る時の音楽表現を考えさせる。(グループ) - 考えた音楽表現を、実際に楽曲にあわせて指揮を振る。(グループ) - グループで話し合いより良い音楽表現を決める。 - 指揮を入れて各グループによる発表を行う。 - 授業の振り返りを行う。	- 指揮による曲の入りの音楽表現を考えさせる。 - 教師で伴奏を行い、全員に指揮の体験をさせる。 - 短時間で発表できるよう留意する。 - 指揮者による表現の違いや雰囲気の違いを感じているか確認する。	○		◎	行動観察 自己評価表
二	3	「夏の思い出」の楽譜(後半8小節)に音楽表現を考えさせる。(グループ) - グループで話し合いより良い音楽表現を工夫し考えさせる。 - 個々で考えた音楽表現を発表しあい各グループで音楽表現をまとめる。 - 授業のまとめを行う。	- 音楽用語を抜いた「夏の思い出」の楽譜を配布する。 - 後半8小節をABCD4か所に分け2か所以上音楽表現を考えさせる。 - 音楽表現を楽譜に記入するときは文章や線など、表現方法は選ばないことを伝え取り組みやすくする。 - 各グループを回りながら声掛けをし生徒の意見を引き出していく。 - 生徒の捉えた音楽表現を全体で共有させる。	○		◎	行動観察 自己評価表
	4	- 各グループ「夏の思い出」で考えた音楽表現を練習させる - 各グループの発表を行う。 - 各グループの表現を共有する。 - 各グループで感じたことを伝えあう。 - 授業の振り返りを行う。	- グループで考えた思いや意図を説明し実際に各グループで演奏させる。 - アドバイスや感想を参考にグループで音楽表現を見直す。 - 音楽表現には、思いや意図が必要であることを考えさせる。	◎		○	行動観察 自己評価表
	5	- 作曲者の音楽表現と生徒の音楽表現を比較する。 - 楽曲の歴史的・文化的背景、歌詞の意味を理解する。 「夏の思い出」の鑑賞を行なう。 - 授業の振り返りを行う。	- 黒板を使って、作曲者の音楽表現と生徒の音楽表現を比較する。 - 作品の生まれた背景を通して、作曲者の意図した音楽表現を考えさせる。 - 歌詞に出てくる情景の映像を見せ作曲者の思いや意図を考えさせる。		◎		行動観察 ワークシート
	6	- 前時のワークシートから、ABCDで捉えた表現を選ぶ。 - 全員で作曲者の音楽表現を意識しながら練習する。 - 各グループに分かれ、指揮者を中心に「夏の思い出」を練習する。 - グループで考えた音楽表現を発表する。 - 授業のまとめを行う。	- 前時のワークシート④から、ABCDで捉えた表現を2点ずつ抜き出し、このクラスで適した表現を生徒と選ぶ。 - 作曲者の音楽表現を歌えるようにABCD一つずつ取り上げ教師主導で練習させる。 - 各グループの指揮者が全体を歌わせることで様々な作曲者の音楽表現の捉え方を実感させる。 - 代表のグループの表現を全体で共有し斉唱を行う。	○	◎		行動観察 ワークシート
三	7	- 前時の音楽表現を再確認する。 - 代表の指揮者を立てて、歌唱の練習を行う。 - 再度模範演奏を聴く。 - 全体斉唱 - 授業の振り返りを行う。	- 前時のワークシートを活用し、音楽表現の確認を行う。 - これまで共有した音楽表現を高めていくために、教師が必要に応じてアドバイスしながら技能を高めさせていく。 - 自分たちの音楽表現を確認させて良さを実感させていく。 「夏の思い出」の音楽表現の良さを斉唱を通して実感させる。		○	◎	行動観察 自己評価表

5 本時の学習指導 (5/7時間)

(1) 本時の目標

作曲者の思いや意図と表現方法を知り、歌唱への生かし方を考えよう。

(2) 授業仮説

「夏の思い出」の楽譜に記載されている歌詞や音楽記号から、作曲者が表現した思いや意図

を考えさせることで、客観的に音楽表現を捉えさせることができるだろう。

(3) 展開

時		学習目標と学習活動	指導上の留意点	具体的な評価基準と評価方法
5	導入	- 前時のワークシートの振り返りを行う。 - 本時のめあて	- ワークシート②配布 - 前時のワークシートから、生徒の感想を何点か取り出し音楽表現に大切なことを確認する。 - 本時のめあてを提示する。	
	展開	- 生徒の音楽表現の解釈を教師と確認する。 - 楽曲の文化的・歴史的背景、歌詞の意味を理解する。 - 基本的な音楽記号を確認する。 - 模範演奏を聴く。 - 作曲者の音楽表現の意図を予想し考えさせる。(ワークシート④) - 個々の表現を取り入れ、グループで一つの表現を考える。 - グループ発表を行う。	- 生徒の音楽表現をワークシート②A・B・C・Dの順に見せる。 - ワークシート②の中から1点抜き出し、作曲者の音楽表現を読み取るときの手掛かりになるよう生徒にフィードバックする。 「夏の思い出」を作曲した年と経緯、歌詞の中の言葉の意味(尾瀬、黄昏)と水芭蕉の花、石南花色の画像を見せる。 - 画像を見せる際は、予想させてから見せることを留意する。 「夏の思い出」楽譜配布 - ワークシート④配布 「夏の思い出」の楽譜から音楽記号を確認する。 - ワークシート④ABCDの中からポイントを四つ絞り各グループに分け考えさせる。 - 花が咲いている(強弱) - 水のほとり(テヌート) - 石南花色に黄昏る(なぜPなのか) - はるかな尾瀬遠い空(フェルマータとP) - 評価基準を生徒に話す。 【タイマー10分セット】 - グループ用のワークシートに考えをまとめるよう伝える。 - グループ発表者を決めておくよう指示する。	イ音楽表現の創意工夫 楽曲の魅力を生み出している音楽を形づくっている要素を用いて、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取り、歌詞の内容や曲想を生かし、どのように歌うかについて考えや意図をもって ワークシート 授業観察
	まとめ	授業のまとめを行う。	次時の授業の説明をする。	ワークシート

6 仮説の検証

研究仮説「表現領域、歌唱の学習において、楽譜を活用して感じ取った音楽表現や、指揮による身体表現活動を用いて明確にした音楽表現を、楽曲の歴史的・文化的背景と関連付けながら他者と共有させることで、生徒が主体的に感性を働かせて思考・判断・表現しながら根拠をもって音楽表現を追求していく、創造的な表現力を伸ばすことができるであろう。」に基づき、歌唱の授業を通して、生徒の創造的な表現力を伸ばすことができたかについて、授業の観察、検証授業前後のアンケート調査や生徒のワークシートと実際の演奏により検証を行う。

(1) 自分ごととして音楽表現を捉えさせることはできたか

① 楽譜の活用を通して

既存の楽譜から強弱記号や演奏記号などの音楽記号を取り除いた楽譜を用いて自分なりの音楽表現を考えさせた。図1は、ワークシートの音楽記号を取り除いた楽譜であるが、2小節ごとに四つに分けたことで、焦点化を図りながら音楽表現を考えさせることができた。また、自分の言葉や図で自由に表記させることで、楽譜を読むことに消極的で苦手意識がある

生徒も意欲的に取り組むようになり、全員が自分なりの表現を書くことができた（図2）。

しかし、教師が課題提示を具体的に行えず、何に取り組めばいいのか分からない生徒もいた。そこで教師が線や言葉などで黒板に音楽表現を記入し、記入した通りに音楽表現を歌ったり、他の生徒が作り上げたワークシートを取り上げ、パワーポイントで提示したり、課題提示を具体的に行ったことで、全ての生徒が課題に取り組むことができた。

また「水芭蕉の花ってどんな花？」、「尾瀬って何？」、「石南花色ってどんな色？」、「黄昏ってどういう意味？」、「ほとりって何？」など、歌詞の意味に対する質問が多くあった。音符や歌詞を手掛かりに音楽表現を創造させ、既存の楽譜との比較を行ったことで、生徒自身が捉えていた内容との違いから、多くの問いが生まれたと考える。歌詞については、画像で説明を行ったことで、積極的にイメージを掴むことができ、多くの生徒が線や言葉で自由に音楽表現を記入していた。滑らかに演奏するのか、強弱をつけるのかが分かりやすく、情景や心情など具体的に書かれているため、生徒が音楽表現をどのように工夫したいのかを見るうえでとても役立った（図3）。

次に、音楽表現をグループで話し合い、グループごとに練習し発表させた。その結果、他のグループが作り上げた音楽表現に対して興味・関心が芽生え積極的に捉えようとしている様子が、授業後のアンケートの記述からも分かる。図4のように、70%の生徒が思いを持つことの大切さに気づいていた。生徒は自分自身で音楽表現を考えたことで、「曲に一人一人の気持ちをこめることが大切だと思う」、「歌詞の意味を考えること」など、歌詞の意味から楽譜を理解しようとする姿勢や表現をするために思いや意図を込めることの大切さを感じていることが読み取れる。

次に、既存の楽譜と生徒が創作した楽譜の比較を行った。生徒の工夫した音楽表現を紹介すると「本物の楽譜ってどうなっているの」と、今まで楽譜に興味を示さなかった生徒が、作曲者の楽譜と自分の創作した楽譜を照らし合わせて考えている姿が見られた。



図1 音楽記号を取り除いた楽譜

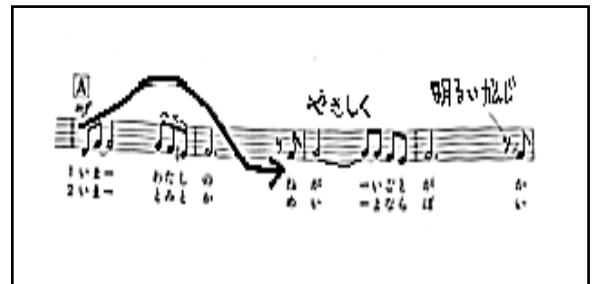


図2 表記した書き方の見本

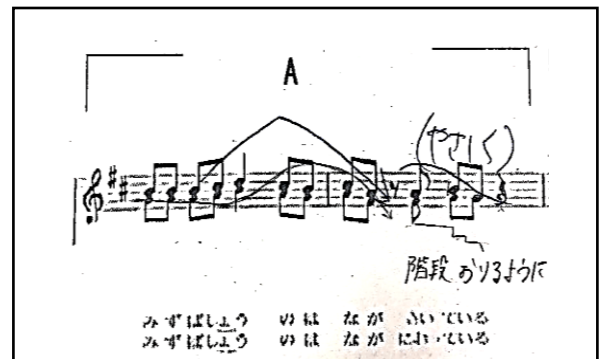


図3 ワークシートより

○グループそれぞれの表現のしかたがあ
って、聴いていておもしろかった。
○曲に1人1人の気持ちをこめることが
大切だと思う。あと、歌詞の意味を考え
ることも

図4 アンケートより

(2) 客観的に音楽表現を捉えさせることができたか

① 指揮の活用を通して

ベートーヴェン作曲「交響曲第5番・運命」の鑑賞を行った。二人の指揮者による演奏を比較させることで、同じ楽譜においても指揮者によって音楽表現が変わることを捉えさせることができた。図5、図6は生徒が書いたワークシートの一部であるが、二人の指揮者の音楽表現の特徴や曲の雰囲気の違いに気づいていることがわかる。

次に、人それぞれの指揮で音楽表現が変わることを実感させるために、比較的容易に取り組める既習曲「翼をください」を用いて指揮の振り方を生徒全員に体験させた。しかし、指揮の振り方を複数教えたことで生徒が混乱してしまったため、曲の入り方に焦点化を図り、指揮の振り方の違いを比較させた。図7のように、「両手で表現している人もいて、人それぞれ違う感じ方があって面白かった。ちゃんと全体に共有できるように指揮ができている人もいて良いと思った。」との記述から、様々な表現の面白さを感じ取っている様子が伺える。また、「指揮者が違うだけで同じ曲でもこんなに雰囲気が変わることが分かりました。自分の感じ方を大切にして指揮をしようと思いました。」と、思いや意図をもって表現することの大切さを実感している記述も見られた。

このことから、生徒に指揮の比較鑑賞や実際に体験させることを通して、人それぞれの発想から生まれる多様な音楽の面白さを客観的に捉える視点を持たせることができた。

② 楽曲の歴史的・文化的背景と音楽表現を関連させることを通して

まず、楽譜で使われている音楽記号の確認と「夏の思い出」の歌詞の意味をプレゼンテーションソフトで画像を見せながら説明を行なった。戦後の街並みの画像を見せながら、戦後復興に向けて日本人の心に明るさを取り戻すために作られた作品であること、作詞の江間章子が疎開中に尾瀬で見た風景をイメージしたことなど、表現方法を読み取る前に手掛かりになる部分を取り上げて説明を行なった。また、歌詞の意味については、生徒の疑問を取り上

カラヤンの指揮の特徴
手の動きが多い
小澤征爾の指揮の特徴
体全体で動いている
カラヤンの音楽(曲の雰囲気)
きれいな感じがした
小澤征爾の音楽(曲の雰囲気)
強い感じがした

図5 ワークシートより

カラヤンの指揮の特徴
旋律を大事にしている感じ
小澤征爾の指揮の特徴
表現を大事にしている感じ
カラヤンの音楽(曲の雰囲気)
ハーモニーを一番気にしている
小澤征爾の音楽(曲の雰囲気)
強弱が分かりやすくメロディーを目立たせている。

図6 ワークシートより

②他の人の表現の良いところは何か?

両手で表現している人もいて、人それぞれ違う感じ方があって面白かった。
ちゃんと全体に共有できるように指揮ができている人もいて、良いと思った。

今日の授業で解ったことは何ですか? 知りたいことはありますか?

指揮者が違うだけで、同じ曲でもこんなに雰囲気が変わることが分かりました。自分の感じ方を大切にして指揮しようと思いました。

図7 アンケートより(生徒E)

げ、「水芭蕉の花」、「尾瀬が原湿原」、「石南花色」、「黄昏る」、を画像で見せ、石南花色に黄昏る夕日の画像を見せた際には、大きな歓声があがっており、「夏の思い出」の情景の美しさを実感させることができた。

次に楽譜の後半8小節をABCDに分けた中から、その音楽表現をどのように歌うか、生徒全員に考えさせた。その際、歌唱表現をグループで話し合うことで、音楽表現の共有を図った。

図8は生徒のワークシートの一部であるが、「作者が尾瀬を思い出し、もう一度いきたいと呼びかけるような表現」や「広大な大地を思い浮かんでフィニッシュへもっていく、思い出の量をのぼし伝える」など、フェルマータの特徴を歌詞の意味や音符の流れ、周りの音楽記号から色々な角度で作曲者の音楽表現を約半数以上の生徒が読み取っている記述がみられた。しかし、残り半数の生徒は十分に記述できていなかったため、教師が具体的に記述例を見せて取り組みやすくする必要があった。

次に、捉えた音楽表現を指揮でどのように表現するか考えさせた。「フェルマータを表現するための具体的な例を見せてほしい」、「滑らかな表現をするために、どうやって指揮を振ったらよいですか」と質問してくる生徒もあり、「まずは、手を滑らかに動かしてみて」、「この滑らかな感じで指揮を振るとどんな感じかな」など、生徒が思考・判断する指導を心掛けた。その結果、約8割の生徒が音楽表現の大切さに気付いている記述が見られ、さらに、約2割の生徒は「作者が曲に込めた思いを把握し、それを理解したうえで、作者の表現、自分のしたい表現を織り交ぜて歌うこと。」と記述しており、作曲者の思いや意図を把握し、理解することの大切さや作曲者の表現を踏まえたうえで、自分の表現を織り交ぜていくことの必要性を理解している様子が伺えた(図9)。

また「まずは気持ち、そして抑揚や発声などの表現力や技術が必要だと思う」とあり、音楽表現だけでなく歌唱技術の必要性を捉えている記述も見られた。

(3) 音楽表現を追求させることができたか

生徒が捉えた音楽表現を歌唱表現に生かしていくために、プレゼンテーションソフトで生徒のワークシートを投影し生徒の音楽表現を比較していった。実際に歌唱する場面では、生徒が考え、生徒の捉えた音楽表現を教師が実際に歌ったり、生徒の捉えた音楽表現がどのような印

④ 〇が入ることによって、どのような表現になるとおもいますか？

作者が「尾瀬を思い出し、もう一度行きたい」と呼びかけるような表現

④ 〇が入ることによって、どのような表現になるとおもいますか？

「広大な大地を思い浮かんで、フィニッシュへもっていく。思い出の量をのぼし伝える」

D

はるかなおげ とおいそら

D

はるかなおげ とおいそら

図8 ワークシートより

〇音楽表現を工夫するうえで他に何が必要だと思いますか？

作者が曲に込めた思いを把握し、それを理解したうえで、作者の表現、自分のしたい表現を織り交ぜて歌うこと。

まずは気持ち、そして抑揚や発声などの表現力や技術が必要だと思う。

図9 アンケートより(生徒H)

象を受け、どのように歌った方が良いか生徒に質問し、グループで考えさせたりクラス全体で考えさせたりと、イメージの共有化を図った。しかし、比較する生徒のワークシートを教師が一方的に選定してしまったため、生徒の主体的な活動につなげることができなかった。そこで、「これからクラスの音楽表現を一つにまとめるから、代表して二つの音楽表現を選んで比較して考えてみよう」と発問を変えたことで、生徒が自由に選択でき自分ごととして授業に参加している姿を見ることができた。

次に、クラスで共有した音楽表現を歌唱で実現させるために、日本語の発音や抑揚、生徒が持つイメージに合った声で歌唱するための発声を考えさせていった。また、技術的に難しい部分に関しては、教師が指導をおこない歌唱表現に主体的に取り組めるようにした。さらに、「尾瀬の様子」、「水芭蕉の花」、「石南花の花」、「石南花色に黄昏ている夕日」などの映像を再度活用しながら、「先ほど見た石南花色に黄昏ている様子を頭に描きながら歌ってごらん」とアドバイスを行い、生徒の捉えたイメージを大切にしながら音楽表現を高めていった。その結果、これまで教師に教えられるままの歌唱表現が、発声や発音、音量など、感じ取った音楽表現をもとに、生徒自身で変化させている姿が生まれた。最終的には生徒たちから「すごい、変わった」などの声が出てくるほどであった。

歌唱表現をより追求していくために、生徒全体で「夏の思い出」の指揮の振り方を確認し、代表の生徒に振らせたところ、これまで創意工夫してきた音楽表現を歌唱表現として生み出そうと生徒自ら口を大きく開け、指揮者の指揮に合わせながら心を込めて歌っている生徒の姿が見られた。

(4) 生徒のアンケートより

授業前のアンケートでは、「歌唱の授業でどのようなことを学びたいですか」という質問に対して、7割の生徒が、「ちゃんと音程を合わせて自信をもって歌いたいから」、「喉を傷めない声のだし方を知りたい」、「上手く歌うために表現を知りたい。」など、音程、発音、音量といった技術的なことが学びたいと回答していた。授業後のアンケートでは、「授業を終えて自分で変わったこと、変えたこと何ですか」の質問に対して、技術面の項目が減り「歌詞の意味を創造して歌えた」、「いろんな情景をイメージしながら歌った」、「穏やかな感じの表現が変わった」など、表現の重要性に気づく姿が見られた。

また、「指揮を振ることで音楽表現を感じ取る手掛かりになると思いますか」という問いに対して、事前のアンケートでは半数が、「まあまあ思う」と回答しており「リズムをずらさずに強弱をつけたりする

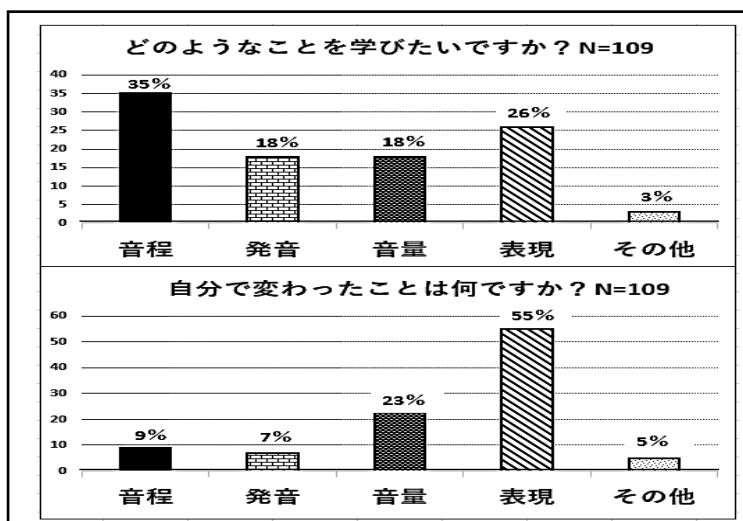


図10 アンケートから

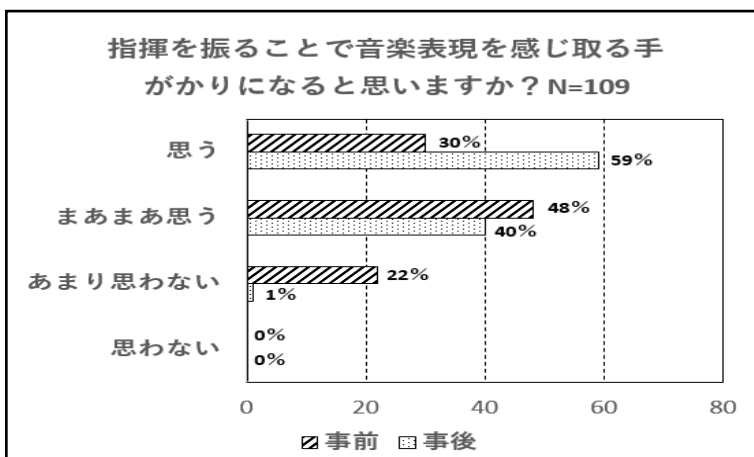


図11 アンケートから

から」、「みんなをまとめるから」、「メトロノームみたいな役割だから」など、拍子を振る視点

で捉えている記述が多く見られた。事後のアンケートでは、「思う」、「まあまあ思う」と肯定的な回答を示した生徒は9割であった。「なぜそう思うのか」という設問に対しては「指揮者が変わっただけで音楽が変わるから重要な役割」、「曲の雰囲気を作る人」、「歌を作り上げる、表現力や抑揚、強弱をつけさせたりするから」など、指揮と音楽表現の関りに気づくことができていた。

さらに、「歌を歌うときに音楽表現を考えることは必要だと思いますか」の設問に、「気持ちを込めればもっと素敵な歌になるから」、「多くの人に感動を与えるから」、「感情を移しやすいから」などの回答だった。授業後は、「表現することで色々な部分で感動を与えると思うから」、「声の質が変わる」、「今回の授業で実感した」、「歌詞の意味がわからないとよく歌えないから」、「曲に個性が出る」、「歌もうまく歌えるし、心に響くから」、「考えることで歌いやすい」という回答であった。授業前の漠然とした雰囲気では捉えた回答に対してより具体的になり、音楽表現の大切さや歌唱技能の変化を感じ取っているからだと考える。

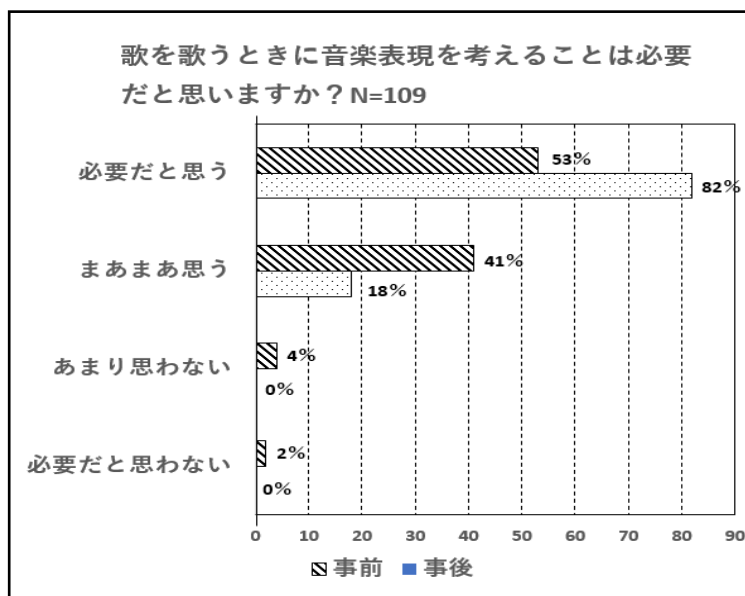


図 12 アンケートから

以上のことから、歌唱の授業において、楽譜を活用して感じ取った音楽表現や指揮による身体表現活動を用いて、明確にした音楽表現を楽曲の歴史的・文化的背景と関連付けながら他者と共有させることで、生徒が主体的に感性を働かせて思考・判断・表現しながら根拠をもって音楽表現を追求する創造的な表現力を伸ばすことができたと言える。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 楽譜や指揮を活用した学習を通して、生徒に自分ごととして音楽表現を捉えさせ、客観的に捉えた音楽表現を根拠をもって追求させることで、創造的な表現力を伸ばすことができた。
- (2) 生徒が音楽表現を追求していくことで、フェルマータの表現の仕方や、音楽表現に沿って強弱を付けるなど、生徒自ら歌唱に必要な技能を高めていくことにもつながった。

2 課題

- (1) 今後は、歌唱に必要な声の出し方を考えたり、歌詞をイメージした声の出し方など、生徒たちが十分に技能を習得していけるための時間を設定していく必要がある。
- (2) すべての領域において、自分ごととして捉えることや、音楽表現に根拠をもたせることを通して、生徒が主体的に音楽表現を追求していけるようさらに授業改善を図りたい。

〈参考文献〉

- 臼井学 2017 『中等教育資料』学事出版
寺尾正 2016 『最新中等科音楽教育法（改訂版）』音楽之友社
中島卓郎 2016 『最新中等科音楽教育法（改訂版）』音楽之友社
樋口隆一 2003 『バッハ探求』春秋社
竹井成美 1997 『音楽を見る！』音楽之友社
八木正一 1997 『だれでもできる声づくり合唱づくり』学事出版
武田雅博 1996 『短期間で上達する合唱指導』音楽之友社
熊本眞見子 1995 『創造的に取り組む身体表現』音楽之友社
八木正一 1995 『たのしい音楽授業のつくり方』音楽之友社

〈参考URL〉

文部科学省学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1282000.htm

文部科学省教育課程部会 芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）（平成 28 年 8 月）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/sonota/1377096.htm